
大魔術師少女

poo

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大魔術師少女

【Nコード】

N16350

【作者名】

p o o

【あらすじ】

ある日一人の大魔術師はその生涯に幕を閉じた。しかし目が覚めると・・・

p o o初のオリジナル小説です更新亀になりますがよろしくお願いします。

大魔術師の終わり（前書き）

p o o 初のオリジナル小説！！地雷要素ありなので気をつけておすすみください。

大魔術師の終わり

大魔術師の終わり

ある世界に魔術のすべてを極めんとした魔術師がいた。彼はその人生の大部分をその研究にささげた。雨の日も晴れの日も彼はひたすらに己の魔術を更なる高みへと昇華させんとした。あるときから人々は彼を「大魔術師」と呼ぶようになった。彼の魔術は人々の生活に光を与えた。彼にとっては取るに足らないものだったが人々は彼が公開したその魔術の恩恵をうけそのことに感謝していた。しかし、そんな彼にも不可能なことがあった。死を乗り越えることだった。彼は今まさにその死が迫ってくるのを感じていた。

「私は・・・死ぬのだな」

長い長い月日を己のために使ってきた。きまぐれで己の術を公開したこともあった。

「感謝されるような人間ではなかったのだがな」

別にそんなつもりじゃないのに人々は笑いかけてくれた。

「私はそんな立派な人間じゃない」

大魔術師なんて私には過ぎた名だった。

彼は朦朧とする意識の中ふと視界に人影を見つけた。

「こんなところに人なぞ珍しいな。幻覚か？」

いよいよ迎えが近いらしい。

「違いますよ！大魔術師様！私ですよ村長のグリーンです！」

「こんな老いぼれのところへどうしたのかね？」

「いつもの魔術の研究をしている幹事がしなかったのここに来てみたのです。いますぐ医者呼びますから」

「いや。いい。自分の寿命ぐらい自分で分かる。ここまで生きたのだ、思い残すこともない」

「そんなことをいうものではないですよ・・・」

なんで泣いているのだろうか？

「私のようなもののためになくでない」

「あなたのおかげで村は豊かになりました。私たちはあなたに感謝しても仕切れないのです」

そんな顔をするな・・・そんな風に思われていたなんて・・・

「村長、お前のせいで思い残すことが出来たじゃないか」

ああ・・・叶うなら

「まだ、生きていたい」

こうして偉大で人々に慕われた大魔術師オドラ・エーネンシュルトはこの世を去った。

大魔術師の終わり（後書き）

がんばって続けていきます

目覚め（前書き）

プロローグ終了。あまりにも短いので珍しく行間をあけてみた

目覚め

目覚め

私の意識が目覚めたのは三歳の頃だった。目覚めたといっても休眠状態であつた

ようでそれまでの生活の経験思い出は私のものようだ。どうやら転生と俗に呼ぶものを

私はしてしまったらしい。そんなことがあるなど私は思いもしなかったのだが、今の私の

名前はエルミラ・フォーネングベルト、性別は女。おそらく休眠状態で今の私の記憶とい

うか意識というか・・・がすごしていたのは魂を適切な状態にするためであつたと考えら

れる。自分の体が少女もとい幼女になっているのに違和感を感じないことには感謝したい。

男の意識で女の体故の葛藤など経験したくないからである。研究が趣味のようだった人間

でもしたいこととしたいくないことぐらいはある。

私が住んでいるのはリンクルード王国という国の王都から馬で二

時間ほどの小さ

な村である。私の前世で住んでいた世界にはこのような国も存在しなかったことから俄か

には信じがたいが異世界なるものであると推察できる。生活水準はあまり変わらない。

「エルちゃんー！ご飯ですよ」

「はい！」

考察はこれぐらいにしておこう。私はこの世界に生きているということは確かなのだから。それに、少しぐらい人の温かさを味わっても罰は当たらないだろう。

目覚め（後書き）

次回から本編突入予定

日常と非日常（前書き）

やっ
ちやっ
た

日常と非日常

日常と非日常

この世に生をうけて早六年私の体は魔力量が非常に高かった（前世よりも1割り増しほど）両親は私に魔術の教育を施してくれた。私の知っている魔術は詠唱式の魔術なのだが、この世界の魔術はそのほかに魔方陣をかいて発動する魔術印式魔術が栄えている。詠唱式よりすばやく発動できる反面効果を上げるためには魔方陣をより複雑に入り組んだものにしないとけないという面もある。私はその両方を合わせた混合型の魔術の開発に今は全力を注いでいた。日常に変化はなく家族はとても仲がいい。こんな日がずっと続けばいいと思っていた。

しかし、時は流れて私が十三の時のことだった。突如亜人の群れが現れたのだ。亜人一匹で大人十人分の強さを発揮するといわれているのにそれが人口300人ほどのこの村に120匹も押し寄せてきたのだ。

「エル！！逃げなさい！！」

「ここは父さんたち大人が何とかする！！」

「エルミラちゃん逃げるんだ！！」

母様が、父様が、村の人が私に向かって叫んでいる。でも私は動けない。

「何してるんだ早く！！！」

村が壊されていくたった十三年・・・でもとても暖かな年月を私に与えてくれた村が、八百屋のおじさんが自慢してた看板が、隣の

家のお姉さんが結婚した時に持っていくといった宝物の箱が納めてあった小屋が・・・みんなの大切が壊されていく。許せない・・・許さない！！！！

「絶対に許さない。我が魔導の前に果てるがいい」

膨大な魔力の奔流が目に見えるほどの濃度で起こる

「エル！！何をするつもりだ！！！！」

「開け。悠久の門よ。空に響く祝福の鐘がお前の目覚めを知らしめる」

呪文を唱えるとともに魔力の奔流が次第に魔方陣を形成していく

「なんだ・・・この魔術は！！」

皆の驚く声を無視して私は詠唱を続ける。

「響け、響け煌めく鐘よ。世の果てまで知らしめよ。今仮初の王が門をくぐった。理を紡ぐは王なり」

芸術にまで昇華された幾何学模様を刻まれた魔方陣が完成した。

「なんと美しい・・・」

「幻影の王の凱旋」

魔方陣をくぐって濃密な魔力で形成された騎士が現れた。

「行け。我が最強の守護者よ」

日常と非日常（後書き）

まあ気長に見守ってください

圧倒（前書き）

相変わらず長くかけない

圧倒

圧倒

魔方陣より顕現した王の力は圧倒的だった。騎士の攻撃でも一発で飛ぶことのない亜人の首が腕の一振りで粉々に吹き飛んでいく。

「すごい……」

「俺たちは助かったのか？」

と村の人々は口々に安堵の声を口にしながら、

魔術師として優秀な父は違った。

「エルミラ。強制顕現は見事だったが。あれは後どのくらい持つ？」

そう顕現に使った魔方陣は汎用性の高い高度魔方陣。王のような上位魔法体の顕現には通常正規の専用魔方陣がある。今回はその構築をする暇がなかったので強制的に顕現させたのだ。つまり、非常に不安定な顕現であるため長時間の現界は不可能なのだ。

「精々後三分といったところでしよう」

「なら次の手を打て。その間の時間稼ぎぐらいはできるさ」

そついうと父は地面に手際よく魔方陣を書いていった。そしてその魔方陣から氷の壁ができて亜人の行く手を遮った。

「今のうちだエルミラ！！」

エルミラは次の呪文を唱え始めた。

「世界の果ての終わりを紡ぐ、敗者の詩に心を惹かれ、現の光は今はなく。世界は闇に包まれる。我が行く手を阻むもの、我が理に仇なすもの、汝が先に当てはなく、現に縛られ死に逝くのみ」

亜人の足元に大規模の特殊用途魔方陣が展開される。

「ならば我は汝らを現の世から救済せん」

魔方陣が光り始め亜人たちは慌てるが氷に先を塞がれて逃げることができない。

「冥府の鎖『第十三連番我、黄泉へ誘う者』」

突如出てきた漆黒の鎖に絡めとられ一匹残らず魔方陣へ引きずり込まれていった。

かつての大魔術師の片鱗をみせる圧倒的な強さのその中に少女は猟奇的な美しさを醸し出していた。

王国騎士団、そして出立（前書き）

スランプ中・・・

王国騎士団、そして出立

王国騎士団、そして出立

亜人を殲滅して家が壊れたりなどの物的損害はあったものの、死者は一人も出なかった。

「エルミラよくやってくれた。お前のおかげでもんな無事ですんだ」

「いえ。お父様がいなければこう上手くはいきませんでした」
みんなでお祭り騒ぎをしているとふと誰かが疑問を口にした。

「でもよ。なんでこんなところにあんなに亜人がでてきたんだ？」

「そういえば・・・」

「ここら辺の亜人なんて数えるほどしかないだろうに」

皆が口々に自分の疑問を口にし始めた。そのとき甲冑のこすれる音がたくさん聞こえてきた。

「なんだ？」

「いったいこれは・・・」

その疑問はすぐに解消された。森の中から駆け足で現れたのは

「王立騎士団・・・!？」

皆が驚いていると中から団長らしき人物が現れた。

「我々の不手際でとんだ迷惑をかけてしまった。本当に申し訳ない」

そういつて深々と頭を下げた。

「いや、皆このとおり生きているんだ。あなたが気に病むことはありませんよ」

そう村長は言った。

「申し訳ない。しかし、亜人の群れはもつといた筈ですし、この死体・・・一体そのような殺し方を？」

「ああ。それか？それは私の娘がやった」

そうエルミラの父が言うと、その顔を見て団長は驚きの声を上げた。

「あなたは先代の宮廷魔術師長！！！！」

「え！？」

思わずエルミラは驚いた。

「なに。片目の視力が低下してほとんど複雑な魔方陣描けなくなつた私にその名は相応しくない」

一呼吸おいて話を続けた。

「そこで願いがある。この娘を宮廷魔術師に推薦していただけないか？」

「そんなことは私ではなく先代のあなたが推薦したほうがよろしいのでは？」

「いや騎士団長じきじきの推薦のほうがいい。私からの推薦では何かと角が立つからな」

「分かりました」

そこに恐る恐るエルミラが

「あの？私の意志は？」

「なに。修行だと思えばいい。お前の実力は他の魔術師を凌駕すると私が保証する」

「えつと。どうしても？」

「ああ。あきらめていつて来い」

「がんばってね。エルミラちゃん」

そう村のみんなに見送られエルミラは騎士団の面々とともに一路王都へと旅立った。

宮廷魔術師の日常（前書き）

制作時間三十分（ストーリー思考時間込み）

宮廷魔術師の日常

宮廷魔術師の日常

ここはエルトラース。この世界で三本の指に入る大都市であり、リンクルード王国の王都である。あれから一週間ほどして正式に宮廷魔術師になった。リンクルードでは宮廷魔術師には個人の家、しかも研究室付きが支給される。そんな私たちの仕事は明確に決まった物はない。ただ朝早くにある宮殿での集会にいき、大臣や官吏達と一緒に国王の訓示を受け、あとは自由・・・といっても夕暮れになつて帰宅許可の出る時間までは宮殿内にいなければならぬ。その間はだいたいの宮廷魔術師は一応割り当てられている駄弁り塔、もとい魔術塔（正式な仕事場）で待機してお茶を飲んだり、魔術談義に花咲かせたりしている。

「エルミラちゃん。この捕縛魔方陣なんだけど、もう少し魔力消費を抑えられないかな？」

そう質問してきたのは、私の五年先輩のフェリアさんである。この人は今まで一番年下だったため、年下が入ってきて嬉しいらしくよく私のことを気にかけてくれる。しかもこの人は魔術師としても優秀で努力家であるので、こうして年下の私にも意見を求めてくる。

「これ以上効率を上げた魔方陣を書くんだしたらどうしても威力が落ちてしまうんじゃないでしょうか？効果を落とさないのであればこれが最善だと思いますよ」

「うーん。やっぱりそうだよね・・・最近下着泥が出るから設置しところと思っただけ・・・」

「！？フェリアさん！！ダメです！！この捕縛魔方陣のベースにしているの対亜人用ですよ！こんなので縛ったら全身骨折ですよ？」

「あ！本当だ。じゃあ、もつと削つても大丈夫だったんだね」

「その前にこの魔方陣教えたの誰ですか？危つくいくら下着泥棒といつても重傷者が出るところでしたよ」

「うゝん？誰だっけ？忘れちゃった」

「はぁ・・・この人は。どうもどこか抜けてるらしい。」

「皆さん！！フェリアさんにこの捕縛魔方陣を渡したのは誰ですか！！」

こうして犯人探しが始まった。

「私じゃあないよ？」

「俺じゃないよ？」

「お前じゃないのか？」

「なんで私なのよ！！！」

などと一時間もこの犯人探しは続いた。その時だった。

「お前ら何そんなに騒いでるんだ？」

その人は入ってくると私が写し取っておいた魔方陣を見て言った。

「この前渡した捕縛魔方陣か。使ったか？」

などとへらへら笑っている。このとき今まで疑心暗鬼で犯人探しをしていた。みんなと私の思いは同じだった。

「……………あんだ（あなたです）か……………！！！」

！！！！！！！！！！

その後ボコボコになって発見されたこの男こそが宮廷魔術師内最大の要注意人物、宮廷魔術師長のアンドリュー・ベルスバツハである。私の日常のストレスは八割がこの人が原因で間違いない。一日を振り返ってそう思った。

これも・・・仕事？（前書き）

途中まで主人公の名前を全部ほかの作品の名前で書いててびびった。

「これも・・・仕事？」

これも・・・仕事？

今日は珍しく仕事がまともに入っているらしい。みんなの顔から「え？仕事？だるいんですけど」みたいな雰囲気漂ってくる。

「働きたくないでござる。今日はのんびり昼寝するでござる。さらばー！！」

グシャー！！！！

「ぶげらー！！」

いつの間にか魔術師長の暴走を止める係りのようなものになっているエルミラが即席の氷弾を自由への逃亡を図った彼の後頭部へ直撃させ鎮圧。エルミラたちはおとなしく仕事へ向かうことになった。

「仕事って・・・これは？」

「ああ。治水工事だよ・・・」

「それは私たちがやるような仕事ですか？」

「予算が上がらなくて凍結してた事業らしくてさ。その計画の主任が昨日「暇か？」って尋ねてきたから暇だって答えたらこうなった」

「自分で原因作つといて逃げようとしたのかこの人は・・・」

「まあ。そう怒るなって。可愛い顔が台無しだぞ？」

「おだてても何も出ませんよ？」

「別にそういうわけじゃないんだが」

アンドリュー・ベルスバツハ三十二歳顔はイケメンなものの破天荒で適当な性格が災いしいまだ独身である。

そんなこんなで工事は進んでいた王国に流れる川の中で二年に一回も氾濫するこの川は有名だったが辺境にあるため予算が少なく今ま何も手を打てなかったのである。今回はこの川を途中から分岐させ氾濫の危険性を減らす計画である。その水路を今掘っているのだが・・・

「ヒヤッハーーーー！！！！」

ドガン！！

「決るように打つべし」

チュドーン！！

「やりすぎだろ・・・」

しかし仕事はこなしているので文句も言えないエルミラだった。

そんなこんなで突貫魔術工事で一週間で開通した水路だった。周辺の住民は水路に水が通ったのをみて喜び、子供は水で遊んで笑っていた。

そんな光景をみて夕陽を背にアンドリューは

「たまにはいいと思わんか？あそこで駄弁って研究して暮らすだけじゃなくてこうやって外で働いて、人の喜ぶ姿を見るのも。なあ、エルミラ」

「そうですね」

エルミラの中での魔術師長の好感度が少し上がった、そんな一日だった。

そう言つて私に服を渡して着替えるように促すと次の服……
ということがずっと続いていった。

「なんで全部こんなにフリルのいっぱいな服ばかりなんですか？」

「だってエルミラちゃんお人形さんみたいですごく似合うんだもの。あ！次はこれね」

「もう勘弁して――――！！！！！！！！！！」

結局それなりにかわいいフリルのない服を何着か買い、フェアリアさんの要望でフリル満載の服を一着買うことで決着が付いたときにはすでに日が暮れていたことは言うまでもない。

「ちゅ・・・かれた」

あ、
噛んだ。

休日（後書き）

実は最後のセリフ本気でタイプミスだったのですが気分です採用しました

情勢（前書き）

先行きが見えない・・・

情勢

情勢

急な話になるがこの世界には大まかに分けて三つの勢力がある。

第一にもちろんこのリンクルード王国。魔術に優れた人物を多く輩出している。リンクルードは大陸の東部に位置する大国で今の広大な領土を確立したのは今から230年ほど前になる。そのとき起った戦争で乱立していた小国家群を一気に併合していったのだ。そして大陸中央にある国はギルド連合である。その名のとおりギルドの長であるギルドマスターが治めている。そして今回話題になるのがリンクルードと連合を挟んで向かい合う大国、ブラウ連邦である。この国は傭兵国家として名をはせたブラウ傭兵団が団長を中心に国を立て、その実力を背景に大陸西部にあつた多数の小国家群を連邦制の一部に組み込み国家共同体としてその機能を果たしている。そして今年第12代連邦代表アインスベール3世が急死。跡継ぎのいなかった代表の後継をめぐり連邦の中では不穏な空気が流れている。

「それにしても連邦が崩壊したらどうなるんでしょうかね？」

私は紅茶を飲みながら隣にいる魔術師長に話しかけた。

「ほぼ確実に戦争になるだろうな。まあ俺たちのところに飛び火しないでほしいけどな」

「私たちが直接巻き込まれることなんて王国が首を突っ込むかギルド連合が戦争に巻き込まれてつぶれたときですからね」

「そうそう。そのときは大陸で二百年以上なかった大戦争だ」

「ありませんよね」

「・・・とこのときのエルミラはこの先起きることを知る由も・・・
ぐへー!!!」

魔力強化した拳を鳩尾に決めてとりあえず黙らせた。

「縁起でもないことを言わないでください!」

「まあ、落ち着けよ。冗談でこんなこと話せるのは平和の証拠なんだからよ。なんとかなるだろ」

「それもそうですね」

ああ、紅茶がおいしい。

その後第十三代代表にアインスベール3世の甥がエンファネルト2世として即位し事態は小康状態に入ったのだった。

「ほらな、なんとかなっただろ?」

「うるさいです。魔術師長」

異変（前書き）

ここから第二章とも言つべきところに入ります！要するに今回はつなぎの話・・・短いよ

異変

異変

それは突然現れた。大陸の北部の海上に突如島が出現したのである。調査に向かったギルドに所属するハンターたちが既に5パーティも消息を絶っている。事態を重く見たギルドマスターから各国へ調査の要請が入った。ギルドが国に依頼をするという奇怪な光景になったのだが、ブラウ連邦魔導騎兵隊500が消息を絶ったことで事態が用意ならざるようになっていくことに大陸中の人々が気づいた。あの島は何かがおかしい。これは共通認識になっていた。そこでギルドからSランクハンターのパーティ二組にAAAランクパーティ5組、ブラウ連邦からは連邦陸戦隊1000魔導騎兵隊800、リンクルード王国からは王立騎士団1500魔導騎兵隊500そして宮廷魔術師を魔術師長自らが率いる50人が調査団として派遣されることになった。小国なら一晩かからずに焼け野原に出来る兵力である。

「魔術師長。なんかこのまえよりやばい雰囲気ですね」

「心配するな。もしものことがあつたら俺が守つてやる」

「そういう言葉は将来奥さんにかけてあげてください」

「人が独身だからってなんだ。喧嘩売つてんのか？」

「いえいえそんなわけではないですよ？」

「なんで疑問系なんだエルミラ！」

「そんなところでじゃれあつてないでいきますよ」

「「じゃれあつて（ねえ）（ません）！！」」

フェリアさんに止められてようやく私たち宮廷魔術師は出発した。先に待つ謎の島への不安を抱えながら……

異変（後書き）

別に先の話が決まってるわけじゃないからどう締めるか考え中なんだよ

上陸（前書き）

細かく刻んでいこう

上陸

上陸

私たちは島の海岸線からすこしはいったところで今後の方針を話し合うことになった。私は副官としてその会議に出席することになった。

「先遣隊の消息はつかめたか？」

「いえ。海岸に接岸していた船以外に今のところ何もありません。会議の中ではやはり目新しい情報はなく何の痕跡も見当たらないことを確認しただけになり、今後の方針へと話題は移っていった。

「これからの探索についてだが、舞台を二つに分けまずは沿岸部を探索。その後合流してから島の内部へ向かうというのはどうだろうか？」

ブラウ連邦魔導騎兵隊長が提案した。

「ふむ、それでいいと私は思うぞ」

王国騎士団派遣隊隊長が賛成を表明しほかの人たちも反対する人はいなかった。そこで特に議論することはなく次はどのように部隊を分けるかということになった。

「連邦とギルドが西から、王国が東から回るはどうですか？」

「西のほうが少ないか？」

「いやSランクやA A Aランクがいるのだからとんとんでしょ？」

「確かにそうだが・・・」

「いや。これでいいでしょう」

「それでは明日の明け方に出発ということでは？」

「今回の会議を終了させていただきます」

あっさりと最初の会議は終わった。

「魔術師長。起きてましたか？」

ずっと会議中目をつぶっていた上司に声をかける。

「あ？起きてたぜ。ただこついつのはほっとけばほかの偉い方がきめてくれるのさ」

「はあ」

まったく何かと省エネ思考のひとだな。

そして翌日の朝私たちは二手に分かれて島の探索へと向かうことになったのだった。

島中央部へ（前書き）

ほかの作品をもっと進めたいのでその作品以外は長めのものはかけなさそうです・・・といふかなんでノートの片隅に主人公の名前しか書いてなかった作品を書き始めたんだろう？

島中央部へ

島中央部へ

結局のところ島の外周には特に何もなかった。合流を果たした後私たちは島の中央部へと足を進めていくことになった。

「ここまでなにもなかったのは逆に不気味じゃないですか？」

「確かにそうだな。まだ行方不明の奴らが一人も見つかっていないってのもきになる」

隣を歩く魔術師長とそんなことを話していた。あんまり話す相手が周りにいないからだ。フェリアさんはさっきからぼーっとしてるし・・・

その後隊列を組み直し歩を進めていくがまわりはうつそうとした森で一向になにも変わったことは起こっていない。この人数が進むには多少面倒だったがそれ以外に特に問題もない。何もなかったがいつそ不気味に感じるほどだ。他の人たちもそう感じているのか口数が減ってきている。三時間ほど歩いただろうか。ふと遠くのほうからひんやりとした風が流れてきた。

「なんだ？」

「この先に何かあるのか？」

などと口々に言い合いながらよりいっそう慎重に歩を進めていった。すると前方に大きな洞窟のようなものがあり地下に続いてそこから冷気が漏れているようだった。

「みんな。よく聞け！これから我々はここから内部に侵入する。

おそらくこの中行方不明のものたちの手がかり、ひいてはこの島の秘密が隠されているかもしれない。心して進むぞ」

エルミラ達はどこか不安な気持ちを押し殺して中に入っていた。

不可解な内部（前書き）

長く書けないね・・・

不可解な内部

不可解な内部

内部に入ってから徐々に行方不明になっている人たちの痕跡を確認できるようになってきた。トラップにかかったあとが複数発見され、そこにのこっていたものからそう判断された。

「どうやら彼らはトラップを全て解除していつてくれたようだ。おかげで楽に進めるわい」

「確かに彼らなら全ての罠を解除していくのも不可能ではなかったでしょうな」

などと口々にみながい合っている中私は何か不気味なものを感じていた。

「大丈夫ーエルミラちゃん」

フェリアさんが心配そうに声を掛けてきた。私はこの悪寒をかき消すように一度大きく身震いをして自分に言い聞かせるつもりで

「大丈夫ですよ」

と答えた。しかしまだなにか不吉な感覚はぬぐいきれなかった。

特に魔物が出てくるでもなく最奥へとやってきたそこには奇妙な紋様がみ込まれている扉があった。

「とりあえずこの部屋で最後だ。なにか手がかりがあるとしたらここだろう。扉を開ける」

そう命じられた兵士が扉に近づいていくとき今までの悪寒の正体を私は悟った。ここだ・・・その扉には触っちゃいけない！！何が起こるかわからないけど止めなければいけないと思った。

「触っちゃダメ！！！」

「へ？」

こちらを振り向いて驚いた顔をしたその兵士の手はすでに扉に掛けられていた。すると扉の紋様が赤く輝き次の瞬間に兵士の姿はどこにもなく徐々にあいていく扉を呆然と眺める私たちがいた。

禁忌の術式（前書き）

遅くなっただけと別に長いのを書いていたわけではないです。すいません

禁忌の術式

禁忌の術式

ただただ私たちは目の前の出来事に呆然とするばかりだった。目の前で行われた現象は間違いなく生命の魔力への転換、かつて私がオドラであったころ編み出そうとしたが暴走した時にあまりにも危険なために理論構築だけであきらめたものと酷似していた。あの術式なら人間の寿命10年分で大国を一つ大きくば地に変える魔力になる予定だった。しかし目の前のこの術式はどうだろう、人一人いやこれまでの人々も含めれば百人はくだらないであろうほどの魔力を生成したはずなのにその魔力はどこにいったのだろうか？そんなことを考えていると誰かが部屋の奥のほうを指さして

「おい！なんか壁に模様みたいなものがあるぞ！！」

その声に皆が部屋の奥に目を凝らした。

「なんだ？」

「なんんだか気味が悪いな……」

などと口々に口走った。そんな中私はこの模様はおそらくあれが今まで生成された魔力を使用するための陣だとあたりをつけた。そうでもなければ説明がつかなかった。それほどこの陣にはなにかあると感じていた。何か人では触れてはいけないようなその存在自体が禁忌であるかのような……

「おい、大丈夫か？」

少し考えに没頭しすぎてしまったようだ。魔術師長が声をかけてきた。それに

「大丈夫です」

とかえすと私はもう一度部屋の奥に描かれている陣に目を向けた。突然陣が鈍い赤色に発光したのはその時のことだった。

目覚め（前書き）

脳内の進行予定表にはこんなやついなかったはず！？

目覚め

目覚め

禍々しく輝く魔方陣そこからあふれ出した光は室内中央巨大な裁断に集約されていく。誰もが目を疑う光景、なぜならこの光は

「可視化できるほど濃縮された魔力だと!!」

驚いている間にも事態は刻々と進行していた天井の配列が入れ替わり新しい陣を構成しようとしていた。

「今度は何が……」

新しく構成された陣が今度は青い光を発し始めた。その光に反応するように赤い魔力球が点滅しだす。誰もが息を吞んで状況を見守る中だんだんと赤い球の点滅が速くなってくる。

「危ない!!」

「くそ!」

あたりが眩いばかりの魔力の奔流に包まれたのと私と魔術師長が簡易防御陣を展開したのはほぼ同時だった。

「皆さん無事ですか!？」

「おい！みんな無事か！」

後ろにいた人たちに声をかける。

「大丈夫だ」

「一人石が飛んできて気絶してるが大丈夫だ」

返事が返ってきて安心したのもつかの間部屋の中はひびだらけになり陣はすべて壊れていたがその中心に膨大な魔力の塊である人型のなにかが煙にまぎれつつすら見えてきた。

「そこにいるのは誰だ！」

そう部屋の中に問いかけてみると思いもかけない返事が返ってきた。

「どもども。みんなのプリティアイドル、心のオアシスことまお様だよー！！！！！」

その声とともに煙が晴れると祭壇の上に露出の激しい女がいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1635o/>

大魔術師少女

2011年9月22日17時50分発行